令 和 ３ 年 度 第 ２ 回 秋 田 県 立 博 物 館 協 議 会 （書面開催）要旨

１　書面開催について

県内での新型コロナウィルス感染症の新規感染者数が増加傾向であったことから、対面での会議を回避するため、書面開催とする。

書面開催の方法は、報告・協議事項について、協議会委員から意見を徴取し集約したものに、館の回答及び考えを付して会議録とする。

２　書面開催の出席委員　　１３名

阿部　　聡　　委員（協議会副会長）
荒川　康一　　委員
梅津　一史　　委員
大友　ひろみ　委員
加藤　　薫　　委員
後藤　節子　　委員
佐藤　好久　　委員
菅原　香寿美　委員
田口　義則　　委員
西村　美智恵　委員
早川　　敦　　委員（協議会会長）
藤田　和彦　　委員
松橋　睦子　　委員

３　報告・協議事項及び意見を求める項目

(1)　報告事項

令和３年度事業経過及び令和４年度事業計画(案)について

(2)　協議事項

①　博物館デジタルビジョンについて

②　ミュージアム活性化事業について

(ｱ)　令和３年度特別展「佐竹氏遺宝展」の評価について

(ｲ)　ミュージアム活性化事業３カ年計画（案）について

(3)　意見を求める項目

①　令和３年度事業内容及び令和４年度事業計画(案)について

②　博物館デジタルビジョンについて

③　令和３年度特別展「佐竹氏遺宝展」の評価について

④　ミュージアム活性化事業３カ年計画（案）について

4　委員からのご意見・ご提言等、ご意見等に対する館の回答

①「令和３年度事業内容及び令和４年度事業計画(案)について」	
委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○資料記載の「秋田県立博物館として目指すものを明確にしていきたい」には同感である。博物館としての目指す姿を明らかにした上で事業に取り組む際、重点目標が生かされると思うので、何を目指すのかの方向性を明確にすることが急務と考える。	●単年度の目標に止めず、中長期的な視点に立った調査研究を行い、講座、講演会、展覧会と言った成果があらわれる様にしたいと考えている。それを県民に伝えていくことが重要ととらえている。
○昨年は中止となった特別展も開催され、企画展と特別展の来館・来場者数を見ると同程度となっており、多くの人が特別展に興味・関心を持って足を運んでくれたのではないかと思う。これからも、県民の関心を引くような企画を期待している。 ○企画展・特別展については、コロナの感染者の状況が変化しているにもかかわらず、安定した来場者数を保っていることから、県民における企画展・特別展の内容への興味関心が非常に高いことを示していると思う。今後とも魅力ある企画展・特別展を期待している。	●来年度も学芸職員の研究成果を発表する企画展、多くの子どもたちに楽しみながら学んでもらえるエンターテインメント性の高い恐竜展を準備中である。
○他施設との連携展示で、いつも大館の図書館で開催される菅江真澄関連の展示の来場者が少なく、残念に思う。開催場所が関係しているのかわからないが、展示の仕方にもう少し工夫があったり、展示に関連した書籍の紹介等があるとよいと感じる。	●例年同じ時期に開催しており、専門性の高いもののため、来場が限られる傾向が見受けられる。また、会期が短く、開催施設との連携が足りず充分な広報活動が行われていないようである。通例に流されず、開催意義を周知してもらえるよう努めたい。
○令和３年度の企画自体は、「美の國の名残」「秋田野球ものがたり」など、いずれも大変興味深く、満足度の高い内容であった。寺崎廣業の印譜などは、学芸員が掘り起こした成果である。収蔵庫の中には、光が当たっていない貴重な資料がまだ眠っているのではないか。さらなる新事実の発見に向け、調査研究に期待している。	●収蔵庫は秋田の宝物庫であり、今後も調査研究を続け、埋もれている資料の活用を図っていくこととする。

委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○広報活動は、様々なツールが活用され、よくなされていたと思う。特に高齢者は、若い世代と違って、テレビをよく観るので、やはりマスコミの影響力は大きいと思う。	●今年度の特別展は当館では初となるメディア企業（今年度は秋田魁新報社）との実行委員会形式による開催であったことから、共催先の協力により前売り開始日から閉展までの定期的な新聞広告やテレビ CM などの広報活動ができた。今後とも展示やイベントなどの情報について、さまざまな媒体により幅広い世代に届けることができるような広報活動を展開していきたいと考えている。
○博物館のデジタル化は，ポストコロナにおいても重要な取り組みになると予想される。博物館デジタルビジョンに示されたデジタル環境の整備とともに，魅力あるコンテンツの整備を期待する。 ○昨年に続き、今年も新型コロナウイルス感染防止に考慮しての活動となり、博物館のあり方にも変化が求められているのではないか。コロナ禍にあっても安心して見学できる仕組みを考えると、デジタルビジョンの早期実現が期待される。	●博物館ならではの「実物との出合い」を基本に見据えながら、デジタルアーカイブによる資料紹介や QR コードを活用したデジタル解説、デジタルサイネージによる館内広報など来館者や利用者のニーズに応えることができるよう進めていきたい。
○今年度はコロナ禍の影響が大きく，特に普及行事や団体の来館に関しては厳しい状態であったと察する。また、県外との往来の制限は、展示を準備する上で障害が多かったものと思う。感染防止の対策を講じることや感染拡大状況に即応した事業実施の変更なども、かなりの負担となったのではないか. ○普及行事では、リモート形式で実施するなどの工夫が講じられたことも評価されてよい。 ○普及・学習活動も年間を通じ、多彩に企画しており、充実が図られていると感じる。新型コロナの影響で来場者・利用者数を求められる状況ではないが、サービス量を減らさず、終息を待ちたい。 ○コロナの影響で博物館教室や講座等、中止となってしまったのが残念であるが、特別展に関わる講演がオンラインでできたことはよかったと思う。展示室でも、人と距離をとることで、ゆっくり・じっくり見学することができるのでないか。 ○コロナ禍で各班ともに活動が制限される中で、県の感染警戒レベルに合わせて博物館の活動を工夫され、発展・普及に向けた努力がなされていたものと評価できる。	●博物館教室やイベントについては、新型コロナウイルスの感染拡大状況により、昨年ほどではないもののやむを得ず中止となった講座等もあったが、開催日程の変更やリモート形式による実施、あるいは代替講座を設けることなどで多くの皆さんに参加いただくことができた。ミュージアムトークについては、昨年度は新型コロナウイルスの影響で全く実施できなかったが、今年度は定員と解説時間に配慮し、受付を準備して参加者を把握するなどの対策を講じながらこれまで 12 回開催することができた。今後とも感染対策を講じて開催内容に工夫を凝らしながら多くの県民に博物館の普及事業に参加いただけるよう努めて参りたい。

委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○博物館教室･講座等については、新型コロナウィルス感染症の感染拡大によって思うように活動できないことに同情を禁じ得ない。その中でも工夫して活動していることに敬意を表する。 ○様々な媒体での情報発信は工夫されていると思う。インターネット活用の発信は今後ますます重要かつ中心になるであろう。比較的若い年齢層に注目してもらいたいのであれば尚のこと、その年代のニーズを探ることが必要になると思う。 ○新聞やテレビに触れることがない人々(世代)が確実に増えていると実感している。事業や企画の情報発信をする際に、媒体をその内容によって棲み分けることも検討してもよいのではないか。各種媒体に均等に同じ情報を振り分けることは決して効果的とは言えないような気がする。	●当館では、印刷物やホームページ、SNS などにより展示やイベント等の情報発信を行っている。ポスターやチラシなど印刷物については、施設や団体への配布が中心となるが、展覧会ごとにその内容に応じた配布先を検討して、限られた枚数をより効果的に配布できるよう配布計画を策定している。ホームページについては、次年度からのデジタル化に向けた取り組みの一環として、スマートフォンやタブレットにも対応し誰もが親しみやすく利用できるサイトへとリニューアルしていく予定である。SNS については、現在当館では Facebook を利用しているが、比較的若い世代が活用しているといわれる Twitter についても今後検討したいと考えている。基本的に展示の詳しい情報等はホームページで、博物館の身近な情報やタイムリーな情報は SNS で提供しているが、今後ともそれぞれの媒体の特徴を活かした効果的な情報発信について模索していきたいと思う。
○普及・広報班の事業計画の中に、「県内外の博物館、美術館、教育機関との連携を進める」とあるが、教育機関や市町村との連携事業というのは、具体的にどのようなものか。	●教育機関との連携について、次年度は放送大学秋田学習センターとの連携事業として 10 月に講演会を当館にて開催する予定となっている。また、これまで秋田県立大学や金足農業高校等からは博物館教室で使用する素材を提供もらっており、それらの素材の活用に関連した授業等も行っている。 　市町村との連携については、秋田市内の県市文化施設のネットワークである「みるかネット連携事業」に当館も加盟しており、各館共通テーマによる連携講座や国際博物館の日にちなんで各館同一日に開催するギャラリートークセッションなどの連携事業に参加している。
○友の会とアイリスの会の統合について動きはじめたとのことで、とても良いと思う。ぜひ具体的に進め、この機会に新しい会員を増やせるよう取り組みをしてほしい。 ○「友の会」「アイリスの会」の統合について、両者は、互いに相手を全く知らない状態である。ボランティアへの思いは一緒だと思うので、会員に丁寧な聞き取りを行ってもらいたい。この機会に会員の思いに向き合ってもらいたいと思う。	●友の会とアイリスの会については、ボランティア活動が両会に混在していることなどから、活動内容を明確にするために統合することとした。まずは双方とも情報交換をしながら交流を深めることで動き始めたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響等もあり、両会とも思うように活動ができない状況となって現在に至っている。次年度は統合に向けた取り組みを徐々に再開しながら、会員がこれまで以上に充実した活動ができ、また入会を検討する方にとってわかりやすく関心のもてる会となるよう支援して参りたい。

委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○学習振興班の取組は、コロナの感染状況に左右される内容が多かったように思うが、きちんとした感染防止対策を施しての実行、または中止等、適切な対応であったと思う。セカンドスクール利用が校種を問わず増加傾向にあることから、コロナ禍を機会に、今後も県立博物館へ新規またはリピーターとして足を運ぶ幼小中高校生が増えるように思われる。これらを踏まえ、今後、幼小中高校生に応じた展示をより工夫されることを期待している。 ○学習振興班の活動においては、コロナ対策を継続するとともに、引き続き門戸を広く開き、博物館の利用促進が図るられるよう期待している。 ○コロナ禍にあっては、来館者対応の事業は思うように運ばないことであろう。様々な制限を設けながらも工夫するほかは無いと思うが、少人数でも受入可能な教室の企画など検討してもらいたいと思う。	●学習振興の活動は体験型展示室の運営と学校団体の利用促進の２本柱からなっている。次年度も同様に室内環境の防疫を徹底しながら、安心安全な運営を心掛けていきたい。 　また、学校団体利用（セカンドスクール）や中学校職場体験、高校生インターンシップについても積極的に受け入れ、今後も利用の促進に努めていきたい。 ●コロナ禍にある体験型展示室は接触や密集密接の危険性が高く、今後も警戒レベルに合わせながらの運営となるものと思われる。これからも多くのアイテムを提供していきたいと考えている。ウィズコロナの新しい時代の体験についても模索していく必要があると思われ、コロナ終息後は再び、多くの利用者となるよう努めていきたい。
○展示・資料班の令和 4 年度の主な取り組み等について、展示活動や展示方法の他組織との連携や協力した取り組みの必要性を強調されているが、その具体的な方法まで踏み込まれた検討を期待する。	● 4 月 3 日から県立図書館において「絵葉書に見る昔」展、11 月 2 日から大館市立栗盛記念図書館で「菅江真澄」展を開催予定である。地域の展示施設を有効利用し、専門学芸員による展示方法を提示して、博物館活動の普及に努めている。
○来年度の予定として、殺虫用の冷凍庫の導入を目指しているとのことであるが、経費の面でも運用の面でも現実的な方策であろうと思う。すでに導入している他館（近いところでは岩手県博）などの事例を調査し、効果的に運用されることを期待する。ただし、冷凍処理に適さない資料もあり、処理に時間がかかる難点もある。薬剤による処理も含めて、資料が収蔵庫に入るまでの過程や虫害が発生した場合の対応の過程を手順化することが望ましいと思われる。	●殺虫用冷凍庫の購入については薬剤の使用が難しいので簡易的にでも導入しようというものである。小型燻蒸窯の併用も考えているが、資料の搬入は秋季の収蔵庫燻蒸を区切りとして行うことにした。 　虫害発生時の対応は発生箇所により多少異なるが展示資料班で情報を把握し、対応を指示する。①隔離または駆除→②殺虫防虫処置（隔離または包み込みによる）→③包み込みによる経過観察である。

②「博物館デジタルビジョンについて」	
委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○「秋田県立博物館デジタルビジョン」については、組織体制、環境整備、資料のデジタルアーカイブ化、フェイスブックでの広報、魅力的なコンテンツのホームページ作成等も含めて大きな一歩であると思う。大変ご難儀をかけるが、この事業の構築に向けて多くの県民が期待していると思われるので、よろしくお願いする。 ○ウイズコロナ、アフターコロナを見据え、必要な準備を進める事に賛成である。 ○秋田県立博物館は、館内業務においても情報発信の面でもいわゆるデジタル化が遅れていたことは否めず、これを機に本格的に取り組んで行かれることを期待したい。また、広報・普及面だけでなく、学芸員のさまざまな業務について、デジタル化によって業務の整理、負担の軽減、情報の共有などのメリットが期待できる部分がないかも合わせて検討してもらいたい。 ○館内展示品の解説の一つとして、スマートフォンを活用すれば音声や文字情報に触れることができたり、展示品の詳細画像を見ることができたりすれば、子どもや高齢者にとってもありがたいのではないか。 ○Wi-Fi環境の整備の必要性を感じている。職員の育成も伴う。県民の多様性を考えると、どこからでも博物館の事業に参加できる環境整備は大切で、参考にしたい。	●博物館のデジタル化はリニューアル後たびたび取り組まれてきたものと思われる。ただランニングコストを確保できず、ハードソフトともその後更新されることがないまま今に至ったようである。液晶モニターのマルチメディア対応機種はついこの間まで 1 台しかなかった。コロナ禍が後押しした秋田県のデジタル化推進の波に乗って、博物館は今年度、最低限のハード機器整備と Wi-Fi 環境の整備を行うこととなった。次年度はスマートフォン対応の新ウェブサイトの構築とデジタルアーカイブの設置を目指している。
○重要な取り組みだと思う。デジタル環境の整備は必須であるが，同時にコンテンツも重要だと思う。博物館に直接足を運びたくなるようなデジタルコンテンツとは何か、について真剣に議論する必要があると感る。例えば、学芸員のコラムなど専門をかみ砕いた紹介（動画）ページなどがあるとより身近に感じることが出来るのではないかと思う。また、小泉潟公園内にみられる昆虫、植物、鳥の鳴き声など、館内や園内の隠れた見どころの動画紹介（空撮など含めて）などがあると現場に訪れたくなるのではないかと思う。 ○広報・普及面においては，YouTube による動画配信なども考えられるのではないか。普及活動の紹介にとどまらず、展示紹介、資料解説なども魅力的なコンテンツになり得る。すでにこうした試みを行っている博物館等もあるので、どのようなことが可能か参考になるだろう。ただし、動画編集ができるスタッフが必要になること、コンテンツ制作に時間がかかることといったデメリットはある。	● 各委員の指摘のとおり、ハードソフトが充実しても肝心なのは創られる中身である。結局は中身を創る人材の確保と育成が大切であると考える。デジタル機器、アプリに詳しい職員の配置が望ましいようにも思えるが、詳しすぎるとプロフェッショナル仕様の扱いにくいハードソフトがそろえられ、誰でもが使いこなせなくなるという状況がこれまであった。それよりもむしろソフトを使いこなせる、編集、デザインのスキルをもった職員を配置・育成できるようにしなければならないと考えている。

委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○真っ先に行うことはハード・環境ではなく、ＷＥＢサイトの全面改修（リニューアルではない）。今のページでは、若い世代（子どもたちを軸にしたその保護者世代）には響かないので、若い世代から三世代を繋ぐことができるような内容に、全面改修を急ぐべきと考える。 　事例として全国各地の水族館のホームページ（すみだ、新江の島、京都など）を見てみると、子どもたちがわくわくして来館を楽しみにできるようなページ内容である。また、スマホファーストでのページ展開の検討も望む。 ○webサイトもだいぶ工夫されているが、コンテンツとして、ミュージアムトークや学芸職員の解説動画などがあってもよいのではないか。	●ウェブサイトの問題は時代のニーズに合った更新が後れたことが原因として考えられる。トレンドを読む編集力と魅力あるデザインにする力またはデザインを判断する力の不足は否定できない。それは博物館の広報物全般に言える。これを危惧して職員のデザイン意識向上に努め、グラフィックデザインのワークショップを月１回ここ２年行ってきた。
○デジタル担当職員の育成は急務であり、専門の担当班を配置しなければ魅力的なデジタルビジョンは実現できないと考える。ヒト・カネに関わることであり、ある程度の時間は必要だが、向こう5年間ほどの計画を示してそれらを確保してもらいたい。	●必要なデジタルコンテンツとは何かを柔軟に考えられる体制をとることができるよう、デジタル担当の配置を求めた。現在デジタル化の事業は班業務を超えたデジタル化推進検討委員会で代行（3 名）しているが、いずれ担当部署が決められ遂行することとなる。
○「デジタル化が急速に進む教育現場のニーズ」は、学校種や発達の段階によって多様だと思う。これまでセカンドスクール的利用を行った学校へのアンケート実施によって、そのニーズを把握することも必要ではないか。実物に出会うための第一歩としてのコンテンツの提示があればよいと思う。 ○ Wi-Fi 環境が整備されれば、館内で人と接することなく展示の解説などが見れるようになるのではないか。そのようなアプリがあったらよいと思う。 　コロナ禍で博物館に行きたくても行けないこともあり、家にいながら博物館を体験できる仕組みや学習できる仕組みがあればと思う。様々な博物館のホームページで「おうちミュージアム」といったものをよく目にする。 ○ぜひ積極的に進めてもらいたいと思う。従来からある博物館教室・講座や、県内市町村、学校との連携という点でも、互いに利便性が高まるのではないか。対面が難しい昨今、オンライン機能を充実させ、離れたまま、Zoom を使った教室や講座の開催という手法も探るべきだと思う。これを機に、ホームページの刷新にも取り組んでもらいたい。現行のページも充実しているが、見栄えという点でもう一工夫があっても良いのではないか。 ○各学校のタブレットの普及、サイトのスマートフォン対応リニューアルに際して、館内の展示やデジタルアーカイブの動画にＶＲ映像を取り入れてみてはどうか。 ○「実物との出会いをサポート」期待している。	●教育現場との連携は最優先課題である。博物館のこれまでの学校対応がまだまだ未熟で、デジタルコンテンツと言えば、一方的なウェブサイトでのワークシート提供に止まっていた。デジタル化はこれからの博物館教育にとって、博物館に来る前、来館時、来館後の対応を迫られることになる。教育現場のニーズを把握し、単に展示室を引率するだけではない新しい博物館の利用方法を提示していきたいと考えている。

③「令和３年度特別展「佐竹氏遺宝展」の評価について」	
委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○評価は上々だと思う。感謝する。「幅広い世代が楽しむことができる内容のものであったか」の評価が、３．０を下回っていることをマイナスに捉える必要はないと思う。展示については、来館者のターゲットをある程度しぼり、それに合わせた展示となるわけであるから。 ○私は訪問できなかったが，集計結果を見る限り、大変良い評価を得られたのではないかと思う。こうした展示会は引き続き検討されると良いと思う。小学生の興味・関心を引き付けるのは難しい展示だったかもしれないが，対象にある程度制限がかかる内容は仕方のないことかもしれない。意見にあったように，こうしたところに理解度を促進させるデジタルコンテンツの活用の機会があるかもしれない。アンケートの回答者の件数の情報があると良いと思う。 ○改善に関する意見については、今後、開催を計画している事業において取り入れもらいたい。 ○千秋文庫の文書と天徳寺所蔵品という展示されることが少ない資料を見られる貴重な機会であったが、これらを合わせて一つの展示シナリオを描くのは結構難しかったのではないかと推察する。展示什器や照明など、秋田県博の設備の制限の中で見栄えをよくするのも大変だったと思う。 　秋田県博では外部との連携による展示はあまり多くないが、コロナ禍の中としてはかなりうまく進められたのではないかと思う。 ○幅広い世代が楽しめることを全ての展示に求めるのは難しいのではないか。歴史専門の人間が数人チームを組むような体制が採れればいろいろ方策が考えられるが、無い物ねだりというものかもしれない。 ○コロナ収束が見えない中で、職員の苦労が伝わってきた。しかし開催できて本当によかったと思う。もう少したくさんの方々に見てもらえればよかったと思う。 ○個人的に他県の博物館に行く機会がないので、博物館とは、どういうものなのかと考える今日この頃である。特別展の時、もう少し学芸員が現場で質問を聞いてくれることを考えてほしい。 ○以前、意見を述べたので、評価・実施結果については、承知した。 ○千秋文庫・天徳寺所蔵品を見て、歴史と暮らしを感じとることができて、何度も足を運んだ。新聞の連載も関心を高めるきっかけになった。	●特別展「佐竹氏遺宝展」はその他の歴史系展示と同様、中高年の観覧者が目立つ結果となった。図録の売れ行きが非常に良かったことからも、実行委員会形式による広報効果が功を奏し、需要層に開催情報をしっかり届けることができたのではないかと思われる。一方、地域ゆかりの「質の高い文化財」というイメージを打ち出し、小学生が好む甲冑着用体験など接触性の高いイベントは差し控えたこともあり、大人向けの重厚な展示という印象が前面に出る結果となり、低年齢層の利用はかんばしくなかった。 　ターゲットを明確にすることと幅広い世代に楽しんでもらうことは、対立する部分もあるが、一つの展示会について、多様なアプローチを可能とするような仕掛けは必要と認識している。現状では大人向けのキャプションや図録解説を作成するだけで精一杯であるが、そうした単線的なコンテンツ提供を複線的なものとするために、デジタルコンテンツの活用や、普及的な観点に立ったスタッフの参与など、委員からの意見を踏まえ、今後の展示会制作に工夫を重ねて参る。子ども向けのコンテンツを作成する場合は、子どもの知識や感じ方に即した要素を、展示内容から見つけ出す作業が必要になることと思われる。 　学芸員による質問への回答は、展示室に配置されている解説員を通じて伝達をうけた際に回答しているが、密集回避のため中断しているギャラリートークを再開するなどして、来館者とのふれあいを高めるよう努める。

委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○評価平均がほとんどの観点で「まずまず達成できた(3点)」を概ね超えていることから、特別展としては成功だったと考える。コロナ禍で来館者数が少なかったとみるか、それがなくとも1万人に達しない可能性があったのかは誰にも分からないが、何事もコロナ禍に落としどころを探す昨今の考え方や見方をいったん脇に置いた上で、評価・分析することも時には必要かも知れない。 ○評価平均が2．7の「幅広い世代が楽しむことができる内容のものであったか」の点については、関心を持っている方々にとっては見応えのある内容だったのは間違いないと思うが、そうではない人々(多くは若年層と思うが)へ、口コミ等でその楽しさが広まる内容であったかという点ではそう言い難いのではないか。いわば玄人好みの展示だったように思う。その内容を崩すことなく、歴史にあまり関心を抱かないような方々やファミリー層を振り向かせるような見せ方やアプローチの方法が何かなかったものかと思う。 ○自由記述にも見られるが、他機関との連携による展示の工夫は、今後も可能な限り継続してもらいたいと思う。 ○特別展の内容が、秋田県誕生 150 周年という節目にピッタリだったと思う。そのため、多くの人、特に秋田県民にとっては興味・関心の引くものとなり高評価につながったのではないかと思う。展示内容の評価にもあるが、幅広い世代が楽しむためにはもう少し工夫が必要であったのではないかと思う。子供向けの解説コーナ等があれば、小学生だけでなく、歴史が苦手な人でも楽しく学ぶことができるのではないかと思う。 ○本紙も連載させてもらい、手前味噌ではあるがこれまでにない企画展になったと思う。やはり歴代肖像画は見応えがあった。佐竹文書も貴重な内容で、佐竹氏の一面を知ることができた。図録は今後さまざまな取材でも活用できそうである。難しかったとの意見もあるが、県立博物館らしい企画だったといえる。ぜひ、今後も民間にはできない意欲的な企画を実施してもらいたい。 ○我が家も家族で「佐竹氏遺宝展」を見学に行く予定だったが、コロナで断念した。秋田県(藩)ゆかりの展示ということで家族も興味、関心があったのでとても残念であった。機会があれば、また企画してもらいたい。 ○アンケートでは小学生や小さい子たちに興味を持ってもらうこと、理解することが難しいとあったが、秋田の県民性や産業などは現代の原点ともつながっているので保護者にどうアピールするかが大切なのかもしれない。忙しい保護者も多いので祖父母と楽しむ佐竹展示のようなキャッチもいいのかなと思う。新聞にも連載で取り上げられ広報の参考にしたい。	●委員の方々に理解いただいている通り、それぞれの展覧会は開催趣旨、調査研究の内容により難易度にはばらつきがある。それをすべての世代の興味関心を集め、楽しめるものにすることは非常に難しいことである。手立てとしては明確な展示コンセプト・対象者の設定とグラフィックデザインの向上が考えられる。 当館の展示室や展覧会のラインナップは基本的に一般を対象に構成されており、子どもたちを対象にしているのは展示室＋実技体験室である「わくわくたんけん室」に集約されている。ともに時代遅れの感があるので、子どもたちのための博物館教育について再考すべきと現在検討を進めている。 例えば、展覧会では来年度の「大恐竜展」のように子どもたち、親子連れをターゲットに絞ったものを取り入れる予定である。また、展示室では QR コード表示によるデジタルアーカイブへ接続できるようにするが、児童生徒が 1 人 1 台タブレットを使用することに対応するべく、今回子ども用の解説を用意した。 すべての展覧会を「すべての世代」に合わせるだけでなく、研究機関としての博物館のステイタスを保持しながら、次代を担う子どもたちの興味関心を高める方法をこれからも模索して参りたいと思う。

④「ミュージアム活性化事業３カ年計画（案）について」

委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○どれに対しても期待感でわくわくしている。Ｒ６年度の展覧会で可能であれば、文楽人形に加えて、同時期の他国の人形も紹介できたら、日本との文化芸術の比較ができて面白いかなと思う。 ○大変興味深い内容の計画案だと思う。 ○恐竜や人形は長年懸案だったテーマなので、意欲的な計画に期待したい。 ○対面の協議会の場であれば説明があったかもしれないが、「ミュージアム活性化事業」とは何か、またそれと特別展との関係、「実施のねらい」がどれも同じなのはなぜかなど、この資料だけではわからない。 ○いずれも好企画と感じるので、効果が上がるよう推進を期待している。小学生を軸にその保護者、祖父母の３世代が博物館に集ってほしい。可能なら夏休み・大型連休を会期に入れてほしい。 ○コロナ禍を前提に企画を検討しなければならず、苦労が絶えないことと拝察する。 (その前提をやや無視した意見になりるが) 恐竜･民俗資料･人形ともに、直接触れたり何か体験できたりする内容は欠かせないと思う。それなくしては、普段あまり博物館に足を運ばない方々には関心を持ってもらえない可能性が大きいと思う。 また、世界や日本全体の歴史の中での位置づけをしつつ、秋田との関わり、今との繋がりなどが実感できる展示になればよいなと思う。 ○どの事業も幅広い世代の人に関心を持ってもらえる内容だと思う。調査・研究の成果が見られることを期待している。また、今年度の特別展のように、他機関とも連携して様々な資料が見られると良い。 ○個人的には「アラマタ伏魔殿」展が気になる。話題の武蔵野ミュージアムの巡回展、本県の道祖神との絡みなども想像され、楽しみである。 ○特別展「大恐竜展」にとても期待している。子どもたちが多く来館することが予想され、博物館の魅力を知ってもらう良い機会になる。わくわくたんけん室を特別展と連携した企画運営に力を入れて、もう一度来たいと思ってもらえるような経験を提供してほしい。	●ミュージアム活性化事業は県立美術館、近代美術館、博物館で特に経費がかかる特別展について予算を一括し、必要に応じて分配する事業である。展覧会の準備には数年かかる物もある。その準備中に単年度決算では実施の確約がとれないため、3 年先を見越した予算案を元に展示事業を計画するものである。博物館は実質今年度から加わった。 　展覧会のコンセプトを明確にするようにと①県民のニーズ、②調査研究の成果、③県外観光客の誘致という視点が求められた。次年度の「大恐竜展」は①県民のニーズに応え子どもたちに博物館の楽しさおもしろさを知ってもらうことを狙いとしている。秋田で見つかる化石（恐竜はありませんが）なども紹介し、化石から秋田のこと、生物のこと、地質のことなど学ぶ機会になって欲しいと思う。 ●「アラマタ伏魔殿」は資料の貸出などで交流がある武蔵野ミュージアムからの提案があり、早くからその巡回展への協力と開催意思を表明していた。現在令和 5 年からの開催を目指して準備が進められている。 ●「人形の千年史」展は他館の協力をいただく。委員の方々の意見の通り、様々な展開プランが想像できるので、内容を精査し多くの方々に楽しんでもらえる準備を進めて参る。

委員からのご意見・ご提案等	館の回答
○ミュージアム活性化事業３カ年計画(案)について、どれも活性化にふさわしい魅力的な企画でわくわくした。マスコミと連携することでより集客が見込めると思う。コアなファンがいそうな展示なので、リピーター向けに、何度も来たくなるような工夫のある展示があればおもしろいのではないかと思う。 ○どの企画もとてもおもしろそうである。とても興味深いものばかりなので、無事に開催できることを祈っている。 ○どの年度の特別展も楽しみである。「アラマタ伏魔殿」展ははじめて聞いた。思わずネットで検索した。博物館か？お化け屋敷か？楽しみである。 ○楽しみである。期待している。	●館員の研究分野が幅広いとは言え、それが県民のニーズにすべて応えるものではないと考えている。今年度の「佐竹氏遺宝展」のように秋田の歴史を深く掘り下げる専門的な展覧会とともに、より親しみやすい、より興味関心を持ってもらえる展覧会の開催も必要と考えている。 そのためには他館との情報交換、展覧会の企画会社、マスコミの事業部との親密な関係を構築し、幅広い分野でクオリティーの高い展覧会を開催できるよう努めたいと思う。

５　総括

オミクロン株の感染拡大に伴う第６波到来という状況の下、第２回博物館協議会を書面開催としました。よって、事業報告、博物館デジタルビジョンや特別展「佐竹氏遺宝展－守り継がれた大名家資料－」に対するご意見等を委員の皆様から頂戴し、博物館として上記の回答を作成しました。それらを踏まえながら、改めて今年度の博物館活動を振り返ることにします。

まず、年間を通じて臨時休館に至ることなく、特別展・企画展を予定通り開催できたことが何よりであり、その内容について高く評価していただいたと捉えています。付帯事業や博物館教室等に関して、その時々の感染拡大状況により延期・変更・中止で対応しましたが、２つの講演会をリモートで開催できたことは、今年度の収穫の一つと考えています。また、実行委員会方式で行われた特別展「佐竹氏遺宝展」において、マスメディアによる広報が大きな効果をあげた一方で、若い世代に向けた発信ではＳＮＳの活用が有効であるというご指摘をいただきました。企画展や他施設との連携展示、さらに博物館教室やイベント等、各事業に係る広報を考えるにあたり、今後、ＳＮＳによる発信に力を入れていくべきことを痛感した次第です。

デジタル化の推進につきましては、知事の年頭あいさつにおいて述べられているものであり、重点事項として取組を継続します。デジタルサイネージの運用をすでに開始しており、３月末までに館内のＷｉ－Ｆｉ工事が完了します。現在、展示室等に設置したＱＲコードを読み取ることで、資料の基本データや展示解説にアクセスできるよう準備を進めています。また、当館ホームページのリニューアルに向けて予算要求しているところであり、認められた暁には、デジタルアーカイブ機能を追加し、スマートフォンやタブレット端末からのアクセスに対応できるよう計画しています。館内外からのデジタルアクセスの利便性を向上させることは、セカンドスクール的利用の充実はもちろんのこと、県内外を問わず広く博物館の利用促進につながるものと考えています。

委員の皆様より頂戴した貴重なご意見を参考に、利用者のニーズに応え、さらなるサービスの向上を目指すことにより、引き続き「魅力ある博物館づくり」に努めてまいります。